

# 次世代の子供につけるべき力と 道徳教育との関連についての考察

－教員アンケート調査の分析を通して－

谷山優子

Understanding Competencies and Moral Education:  
An Analysis of Teacher Questionnaires

Yuko TANIYAMA

## 1. 本研究の動機と背景：未来社会において自立的に生きる資質・能力の育成

今後2030年までの約10年間に、またその先にあるいまだかつて経験したことのない社会（わが国では「Society5.0」と呼ぶ「イノベーション社会」）に向けて、様々な予測をしながら学校教育は行われなければならない。これからの教育を見通すには、流行に対応する教育と、人を育てるという不易の教育とを併せ持つ視野が必要である。

平成29年3月の文部科学省の「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の制定並びに幼稚園教育要領の全部を改正する告示、小学校学習指導要領の全部を改正する告示及び中学校学習指導要領の全部を改正する告示等の公示について（通知）」にその基本的な考え方として「教育基本法、学校教育法などを踏まえ、我が国のこれまでの教育実践の蓄積を活かし、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される子供たちが、急速に変化し予測不可能な未来社会において自立的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力を一層育成することとしたこと。（略）」が挙げられている<sup>(1)</sup>。また、小中学校の教育内容の主な改善事項として、①言語能力の確実な育成（情報を正確に理解し、適切に表現する力の育成）、②情報活用能力の育成（情報手段の適切な活用やプログラミング的思考の育成）、③理数教育の充実（日常生活から問題を見出す活動、必要なデータを収集・分析し課題を解決する統計教育や自然災害に関する内容の充実）、④伝統や文化に関する教育の充実（古典や文化財、年中行事の理解、我が国や郷土の音楽、和楽器、武道、和食、和服などの指導の充実）、⑤体験活動の充実（命の有限性、自然の大切さ、挑戦、他者との協働の重要性を実感させる体験活動の重視）、⑥外国語教育の充実（外国語能力の向上を図り、国語教育との連携で日本語の豊かさに気づく指導を充実）の6つの事項が挙げられている。そのほか、道徳教育の充実や特別支援教育に関す

る主な改善事項については、大きく項目立てを行って述べられている<sup>(2)</sup>。

このような通知に至る前段階として平成28年12月に出された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」の「はじめに」の中に、「本答申は、2030年の社会と、そして更にその先の豊かな未来において、一人一人の子供たちが、自分の価値を認識するとともに、相手の価値を尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、よりよい人生とよりよい社会を築いていくために、教育課程を通じて初等中等教育が果たすべき役割を示すことを意図している。」とある<sup>(3)</sup>。この答申の中で、グローバル化、社会の多様性、急速な情報化や技術革新に伴う社会の変化の中で、主体的に判断し、他者と一緒に生き、課題を解決していく力を「生きる力」としている。

未来の社会が大きく変化するという予測については、世界的に関心が高い。ニューヨーク市立大学大学院センター教授キャシー・デビッドソン氏は、「子供たちの65%は将来、今は存在していない職業に就く」<sup>(4)</sup>と予測している。OECD（経済協力開発機構）は、Education 2030 Project<sup>(5)</sup>の序文で「我々は、社会、経済、環境など様々な分野において前例のない変化に直面している」と述べている。これら世界情勢もあり、我が国も文部科学省や国立教育研究所が「2030年の社会と子供たちの未来」<sup>(6)</sup>についての研究を推進している。東京学芸大学では「次世代教育研究推進機構」<sup>(7)</sup>を立ち上げ、「日本における次世代対応型教育モデルの研究開発」を行っている。このような先行研究の中で最も強調されているのは、グローバル化と急激な技術革新が進む中で、人々がいかに心を通わせ合い、それぞれを尊重しながら持続可能な社会をどのように創っていくかについてである。

つまり、これからの社会を生きる子供たちは、グローバル化、通信情報技術の進展、少子高齢化など急激な社会の変化に直面しながら生きていかねばならないということである。子供たちが立ち向かう様々な課題は、高度化、複雑化、多様化し、子供たちの人生の先行きは不透明である。このことは、日本のみならず世界共通の課題である。

## 2. 研究の目的

このような大きな枠組みから見えていくと、これからの社会を生きる子供たちにつけるべき資質・能力などのようなものかといった捉え方も必要であるが、目の前の子供たち一人一人がよりよい人生を送ることができるようにどのような力をつけさせたいかという学校教育現場の教員の捉え方も重要であろう。よりよく生きるとかよりよい社会を築くとかいう力の育成については、学校教育においては道徳教育が要となる。よって本研究は、次世代を生きる子供につけるべき力はどのようなものであるのかについて、学校現場の教員へのアンケート調査をもとに考察し、これから求められる資質・能力を道徳教育と関連づけて考察することを目的とする。具体的には、次の3点について明らかにしていく。

第1は、これからの社会を生きる子供たちに取り組みせたい課題について、学校現場の教員はどのように捉えているのかを明らかにする。

第2は、これからの社会を生きる子供たちにつけたい力について、学校現場の教員はどのように考

えているのかを明らかにする。

第3は、これらの結果をもとに、次世代の子供たちにつけるべき力はどのようなものであるかを分析し、これから求められる道德教育と関連づけて考察する。

### 3. 研究の方法：アンケート調査の概要

#### (1) 調査対象者

兵庫県のA市、B市の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校教員（20代～60代の男女）223名。男女の内訳は男性103名、女性120名。学校種別内訳は、小学校141名、中学校73名、高校5名、特別支援学校4名。年代別では、20代103名、30代63名、40代26名、50代29名、60代2名。（表1・2のとおり）

表1 調査対象者（学校種別）

	人数	割合
小学校	141	63.20%
中学校	73	32.70%
高校	5	2.30%
特別支援学校	4	1.80%
合計	223	100%

表2 調査対象者（年代別）

	人数	割合
20代	103	46.20%
30代	63	28.30%
40代	26	11.60%
50代	29	13.00%
60代	2	0.90%
合計	223	100%

#### (2) アンケート調査項目と調査方法

アンケートの調査項目は以下の2問である。

・問1 「あなたは、これからの社会を生きる子どもたちにどのような課題に取り組ませたいですか。」

⇒12の選択肢から3つ以内に○をつけて回答するものとした。選択した項目について取り組ませたい課題が具体的に自由記述できる枠も設ける。項目に選択したいものがなければ13番目の「その他」を選択するものとする。

・問2 「あなたは、これからの社会を生きる子どもたちにどのような力をつけたいと考えていますか。」

⇒自由記述で回答を求める。

#### (3) 選択肢

アンケート調査項目として挙げた問1の選択肢は以下の13項目である。これらの項目は、これからの社会や教育で課題とされているグローバル化、少子高齢化、情報化、AI等の技術革新、共生社会、持続可能な社会（ESD）、不登校や引きこもり、いじめや虐待などから12項目を設定した。また、これら12項目に当てはまらない場合の選択肢として13項目目に「その他」を設定した。

1. キャリア教育（なぜ働くのか など）

2. スポーツ、武道の精神（自分を高める など）
3. ものづくり（信頼される製品 など）
4. 奉仕の精神（ボランティア、社会参加 など）
5. 多様性を認める社会（LGBT、マイノリティ など）
6. 国際理解教育（他の国の文化、宗教 など）
7. 情報化社会（ネット、AI、IoT、YouTuber など）
8. エネルギー教育（省エネ、原子力発電 など）
9. 障害者や子ども、高齢者の住みよい社会づくり
10. 郷土の文化、生活（地元を誇りに思う心 など）
11. 環境教育（水、動植物 など）
12. 命を大切にする
13. その他

#### 4. 結果と考察

（1）これからの社会を生きる子どもたちに取り組みせたい課題

223名の教員に13の項目から3つ以内の選択をしてもらい、合計665の回答を得た。無効回答は0であった。なお、選択した番号の横に、「取り組みせたい問題解決学習の課題の具体例」として自由記述欄も設けた。

「その他」の選択は、回答数3（2.0%）であった。このことから、設定した12項目の選択肢は、教員が選びたい項目としてほぼ網羅されていたものとする。教員の回答で多かった順にまとめると以下の通りである。（表3）

表3 これからの社会を生きる子供たちに取り組みせたい課題についての質問項目の選択結果（上位から）

多い順	質問項目	回答数と割合
1	命を大切にする	127 (57.0%)
2	キャリア教育（なぜ働くのか など）	87 (39.0%)
3	情報化社会（ネット、AI、IoT、YouTuber など）	74 (33.2%)
4	多様性を認める社会（LGBT、マイノリティ など）	72 (32.3%)
5	障害者や子ども、高齢者などの住みよい社会づくり	56 (25.1%)
6	奉仕の精神（ボランティア、社会参加 など）	39 (17.5%)
6	国際理解教育（他国の文化、宗教 など）	39 (17.5%)
8	郷土の文化、生活（地元を誇りに思う心 など）	36 (16.1%)
8	スポーツ、武道の精神（自分を高める など）	36 (16.1%)
10	ものづくりに打ち込む人々（信頼される製品 など）	29 (13.0%)
11	環境教育（水、動植物 など）	26 (11.7%)
12	エネルギー教育（省エネ、原子力発電 など）	9 (4.0%)
13	その他	3 (1.3%)

「命を大切にする（回答数127）（57.0%）」が際立っており、6割の教員が選択していた。この回

答者の自由記述で特に目立っていたのは、「いじめ問題と関連させて、何があっても命を大事にすることを伝える」、「自殺や殺人」などいじめや自殺に関連する取り組みであった。そのほか取り組ませたい課題の具体例について気持ちや理由も併せて書かれており、「事件のニュースで気になっているので」、「ずばり、命はかけがえがないので」、「自然災害」、「防災・震災のビデオ等から命の大切さを学ばせる」、「防災リュックを用意しよう」、「動物を飼育し(植物を育てて)、命の大切さを実感させる」、「生い立ちを親から聞き取る」、「戦争・病気」、「平和学習」、「生命誕生の不思議」など、生命以外にも防災、戦争、病気(ガンなど)に関するものも多く挙がっていた。

次いで、「キャリア教育(回答数87)(39.0%)」が多かった。約4割の教員が選択していた。この回答者の自由記述で多くみられたのは、「進路選択について」、「なぜ働くのか、なぜその仕事が存在するのか」、「道徳の授業内で取りあげたい」、「将来を見据えた自分の在り方」、「職場見学」、「仕事の面白さ、楽しみ、生きがいについて」、「自分たちはどう働くべきか。10年後、仕事はどうなっているか。」、「AIができること、人でないといけないこと」、「自尊感情を高めさせたい」、「自分や相手を大切に思う心を育てたい」、「自分から進んで行動する力をつけたい」、「変化する社会に人と協働して課題に立ち向かう力をつけたい」、「夢を持って取り組んでほしい」などが取り組ませたい課題の具体例として挙がっていた。

3番目は、「情報化社会(回答数74)(33.2%)」で、3人に1人の教員が選択していた。自由記述で多くみられたのは「情報機器の取り扱い方」、「SNSのメリット、デメリット」、「IoTによってどんな社会になるか。自分たちはどうよく生きるか」、「AIができること、人でないといけないこと」、「正しい情報を選択する力をつけさせたい」、「ネットを使う時のルールやマナーを身につけさせたい」、「ネット上のつながりと実際の人間関係」などに関するものであった。

僅差で4番目は、「多様性を認める社会(回答数72)(32.3%)」で、3人に1人の教員が選択していた。「世界との意識の差」、「これまでの固定観念にとらわれないものの見方」、「性の多様性だけでなく人種や障害者に対する課題、差別や偏見をなくすこと」、「人権感覚」、「少数の意見を取り入れていことが住みよい社会(学級)であると感じる」、「人と違うのが当たり前と思える、他者を受け入れる」、「発達障害のある子との関わり方」などが記述されていた。

5番目からは、選択人数に少し開きがあり、「障害者や子ども、高齢者の住みよい社会づくり(回答数56)(25.1%)」で4人に1人の教員が選んでいる。「少子高齢化が進むこれからの日本の在り方」、「いろいろな人で社会をつくっていく、皆が住みやすいことは何かということに目を向けさせたい」、「障害児との交流会や車いす、アイマスク体験」、「どうすれば共生できるか」、「発達障害に対する社会的理解」などが挙がっていた。

6番目は「奉仕の精神(回答数39)(17.5%)」で、これ以降はグッと選択する教員が少なくなる。「他者との関わり方の大切さと重要性」、「コミュニケーションの練習」、「兵庫県に生まれ、阪神淡路大震災の経験から、切実に大事」、「無関心が多いというか自分のことで精一杯なのだが、それでも相手のことを考えることが大切」、「奉仕ではなく協働の精神で主体的に楽しみながらできるボランティア」、「被災地の人に本当に必要な支援とは」、「人々の助け合いの思いで成り立っているので自分から社会に参

画させたい」などが挙がっていた。

同じく6番目の「国際理解教育（回答数39）〈17.5%〉」には、「イスラム教やユダヤ教、キリスト教は実は同じ宗教だったなど意外と知られていないことを主題にやってみたい」、「日本の現状を理解し、国際比較をし、未来への課題を検討」、「有名なアーティストや映画スターの生きざま」などの取り組みたい事例が挙がっていた。

8番目は「スポーツ、武道の精神（回答数36）〈16.1%〉」で、「勝敗に関わらずがんばる」、「メンタルトレーニング」、「人間としてどうあるべきか、感謝の気持ちなど考えさせる」、「過去の偉人から強い心を学ぶ」、「壁にぶつかったときの乗り越え方」、「選手が主体で考えるチーム力の向上」、「有名な選手の目標の立て方」など、スポーツの精神面についての記述が目立った。

同じく8番目の「郷土の文化、生活（回答数36）〈16.1%〉」には、「地域の伝統をつないでいく」、「自分の住んでいる町や国を愛してこそ。町づくりや将来の日本を考えさせる課題に取り組みたい」、「地元活性化」、「地域のフィールドワーク」など伝統や街を愛すること、活性化に関する記述が多くみられた。

10番目は「ものづくり（回答数29）〈13.0%〉」で、「信頼・信用のあるものづくり、人間関係力を学ばせたい」、「ものづくりに打ち込む職人が減ってきているので、ものを作るすばらしさを伝えたい」、「地域産業の体験」、「生活を豊かにするために自分で何かを作り出すには先人の教えを知る必要がある」などが書かれており、精神面や郷土愛と共通するような記述もみられた。

11番目は「環境教育（回答数26）〈11.7%〉」で約1割の教員が選択した。「異常気象が多すぎると思うので環境や自然について学ぶ必要がある」、「人間が見えていないところで、生活がどのように自然と関係しているか」、「未来を生きる子供たちが必ずぶつかる環境汚染など」、「絶滅危惧種を救うためには（どうすべきか）」、「省エネや3Rについて調べる」など解決困難な課題に向かう事例が多くみられた。

最後の12番目が「エネルギー教育（回答数9）〈4.0%〉」で、「原子力の安全性と危険性」であった。

13番目に設定した「その他」を選択した3名〈1.3%〉は、「よりよい他者との関わり方」、「まわりに助けを求められる力」、「思いやりの心」と具体例を挙げていた。これらの意図するところは、他者と関わる力であることが共通すると考える。

## （2）これからの社会を生きる子供たちにつけたい力

問2の「これからの社会を生きる子供たちにつけたい力」の自由記述で223の回答のうち23が記述なしであった。200の自由記述内容をカテゴリーに分けようと試みたが、いくつものカテゴリーにわたって書かれているものも多くみられたので、回答数として数えるのではなく、回答の頻度を4段階で示す（A：回答者の半数以上にみられる、B：回答者の4分の1以上にみられる、C：回答者の1割程度にみられる、D：回答者の数名にみられる）ことにした。なお、C、Dの回答については顕著なものを例示しておくものとする。

カテゴリーの分類の仕方として、記述に意味として含まれる文脈を読み取ってカテゴリー分けを

次世代の子供につけるべき力と道徳教育との関連についての考察

行った。その結果、「命を大切にする」、「生きる力」、「考える力」、「自分を大切にする」、「変化に対応できる力」、「進路選択」、「問題解決力」、「粘り強く取り組む力」、「危険回避力」、「チャレンジする力」、「明るく生きる力」、「自ら学び自ら実践する力」の12のカテゴリーと、「コミュニケーション力」、「思いやり」、「グローバルに生きる力」、「寛容の力」の4つのカテゴリーに分けることができた。

大枠のカテゴリーとして、「個々の子供につけたい力」と「人と関わるためにつけたい力」の2つに大きく分けることができた。結果からいくつか抜粋しておく。(表4)

表4 これからの社会を生きる子供たちにつけたい力についてのアンケートの自由記述からの抜粋

	カテゴリー (意味として含まれる文脈)	記述からの抜粋	回答の 頻度
個々の 子供に つけたい 力	「自分の命を大切にする (力)」	「嫌なこと、耐えられないことに直面したとしてもどう乗り越えていくかを考えさせる。それと、命は大切、絶対死んじゃあかんということの意味をその人以外の気持ちを踏まえて考えさせたい」(20代女性小学校) 「『死ぬ』という言葉をなくしたい」(30代女性中学校) 「自己肯定感が低く、生きている世界があまりにも狭すぎる子供が多いと感じている。自分の命を失わない自分を認める力をつけたい」(20代女性小学校) 「災害などから自分の命を守る力」(20代女性小学校) 「命を大切にする力」(20代女性特別支援学校) 「自分ひとりにどれだけの人がかかわったか知り考える」(60代男性小学校)	A
	「生きる (力)」 「生き抜く力」 「自立」 「先を見通して生きる力」	「激しく変化するこの時代、予測不能な世の中で生きていくのに、どんな環境でも生きていける力」(20代男性小学校) 「先がわからない時代を生きる子供たちが自分の人生を生き抜く力」(40代男性高校) 「自分はどう働くべきか、どうよく生きるか、人を信頼し、人に貢献し自立する力」(30代男性中学校)	A
	「変化に対応できる力」 「臨機応変」「環境に適応する力」 「多様な考え」「柔軟性」 「多面的なものの見方」	「どんな社会でも生きていけるよう変化を拒むのではなく変化の中で生きていく力。教師は変化を拒むかも」(30代男性小学校) 「変化に対応できる力、あきらめない力、柔らかな発想力」(30代女性高校) 「自分の気持ち、意見、意志を大切に社会の変化にうまく付き合ってもらいたい。ただ、変化に流されないでほしい」(30代男性中学校)	B
	「考える力」 「思考力・判断力・表現力」 「情報を正しく読み取る力」 「工夫する力」	「できないことをできるように方法を考える、試してみることが大切」(40代女性小学校) 「自分や他人(他の生物、地球)を大切に思う心とそれらを守るための方法を考える思考力、実行する力」(20代女性小学校) 「ものごとの流れに予測して対策、解決策を考える力」(20代男性小学校)	C
	「自分を大切にする力」 「自分らしさを出せる力」 「自己理解」	「不器用でもバカ正直でもいいからまっすぐに生きる力」(40代男性中学校) 「どんな自分でいてもいい」(20代女性小学校) 「自己表現力」(20代女性特別支援学校) 「マインドフルネス(自己を見つめ、心が静かになり、自己を高める力)」(50代女性中学校)	C
	「進路選択」「見通す力」 「将来の夢」	「夢を実現させるために今自分にできることを考える力」(40代女性中学校) 「見通しを持った進路選択ができる力」(20代女性小学校)	D
	「問題解決力」「自己決定」	「色々な情報に振り回されず取捨選択し、自分で選択肢を吟味して考え、自己決定する力」(20代女性小学校) 「疑問や課題を自分で見つけ出し、なんで、どうして、と思える子になり、解決方法や自分なりの調べ方で答えを導き出せる力」(20代女性小学校)	D
	「粘り強く取り組む力」「責任感」 「成長しようとする力」 「一生懸命」「継続力」「努力」	「何事にも全力を注げる力、あきらめない心」(20代女性小学校) 「自分の力を発揮し自ら成長していこうとする力」(30代男性小学校) 「粘り強く何かに取り組み、やり遂げる力」(30代女性中学校) 「物事に一生懸命に取り組むことのできる態度」(50代女性小学校)	D
	「危険回避力」	「よく考えて行動し、災害から身を守る危険を回避する力」(60代男性中学校)	D
	「チャレンジする力」	「何事にもチャレンジする力、あきらめない心」(30代男性中学校) 「論理的・合理的な生き方も大事だが、古き良き時代のがむしやらさや何でも挑戦してみよう、やってみようと思える力」(20代男性小学校) 「何事にもチャレンジする力」(30代男性高校)	D

人と関わるためにつけたい力	「明るく生きる力」 「笑顔で生きる力」 「幸せになる力」	「自分のことだけを考えるのではなく、誰かのため、幸せのために考え、動く力をつけさせたい」(20代女性小学校) 「ピンチの時にでも明るく生き抜く力」(40代女性高校)	D
	「自ら学び自ら実践する力」	「情報化社会だからこそ、集団で生きる術や協力する重要性を理解し行動する力」(20代男性小学校) 「自ら学び、また学ぶ方法を自ら見つけ、実践する力」(40代男性高校)	D
	「コミュニケーション力」 「伝える力」「つながる力」「協力」	「やはりコミュニケーション力は何時の時代でもどんな場所でも必要。自分を助ける力をつけさせたい」(20代男性中学校) 「ボタンを押せば何でも調べられる時代だが、様々な機器を使っても調べることのできないコミュニケーションの力を育てていかねばならないと思う」(20代男性小学校) 「自分で考え、意見を伝え、相手が納得いくようにプレゼンする能力」(20代女性小学校)	A
	「思いやり」「違いを認める力」 「他者理解」「偏見を持たない」 「手助けする力」	「LGBT、マイノリティだけでなく、多文化も含め多様な価値観を認め合う社会が必要」(40代女性小学校) 「人を思いやり、折り合う力をつけさせたい。折り合うことは勝ち負けではないし、譲ったわけでもなく、多様な意見があわさり、新しい意見として前に進むことであるとわからせたい」(40代女性小学校) 「思いやり、一生懸命」(20代女性小学校)	A
	「グローバルに生きる力」	「国際的で多様性の時代になっていくからこそ、自分の育った町や国のことをよく知り大切にしてほしい」(20代女性小学校) 「変化の大きな時代においても国際社会で日本人として誇りをもって活躍できるための力」(30代男性小学校)	D
	「寛容の力」「素直にきく力」 「人を信頼する力」「人を許す力」	「目の前の友達を信じることを大切にす」(30代男性小学校) 「自己開示し、人を受容し、寛容の心をもつ」(40代女性小学校) 「人を許す力」(20代男性中学校)	D

多くみられた（回答の頻度「A」）のは、「命を大切にす」、「生きる力」、「コミュニケーション力」、「思いやり」、であった。ほとんどの教員の自由記述にこれらのうちのどれか、またはこれらのうちのいくつかが書かれていた。

次いでよくみられた（回答の頻度「B」）のは、「変化に対応できる力」であった。「臨機応変」、「環境に適応する力」、「多様な考え」、「柔軟性」、「多面的なものの見方」等、変化する社会にうまく適応してほしいという旨の記述がみられた。

「考える力」や「自分を大切にする力」は、回答頻度「C」で記述量を分けてみたが、上述した「生きる力」や「変化に対応する力」と通底するかもしれない。「思考力・判断力・表現力」、「情報を正しく読み取る力」、「工夫する力」、「自分を大切にする力」、「自分らしさを出せる力」、「自己理解」等の記述が目立った。

散見される程度（回答の頻度「D」）の回答は、カテゴリーに分けると多岐にわたる。「進路選択」、「問題解決力」、「粘り強く取り組む力」、「危険回避力」、「チャレンジする力」、「明るく生きる力」、「自ら学び自ら実践する力」、「グローバルに生きる力」、「寛容の力」であった。これらは、教育の普遍的な部分でもある。どのように社会が変化をしても必要であるし、変化するからこそさらに必要な力であると教員は考え選択したのかもしれない。

(3) 次世代の子供たちにつけるべき力はどのようなものであるのか：これからの道徳教育との関連  
次世代の子供たちにつけるべき資質・能力をグローバルな視点でみる先行研究と学校教育現場の教

員の視点であるアンケート調査の結果に基づき、次世代を生きる子供につけるべき力はどのようなものであるのかについて考察したい。

教員のアンケート調査の結果は、「命を大切にする」が圧倒的に多くみられ、次いで「生きる力」「生きぬく力」とあるように、いじめや災害、犯罪などから子供たちが命を奪われることなく、生きてほしいという願いがこめられていることがわかった。変化する社会で「変化に対応する力」をもって、状況を考え、他者とコミュニケーションを取り、思いやりをもち、自分も人も大切にす、また、自然や環境に対する課題解決力という、自分自身に関する力、他者と関わる力、命や自然との関わる力を育まねばならないと考えていることが明らかになった。

西野（2017）は、アメリカ、オーストラリア、シンガポール等の教育改革を調査し、「個人の幸福（Well-being）の実現に向け、教育は健康なライフスタイルや知識的社会的情動的スキルを増大させ、個人をエンパワメントする」<sup>(8)</sup>という新たな資質・能力モデルについて指摘している。

そのような力をつけるためにどのような授業や取り組みが必要であろうか。自分や人、社会と関わる力を育成するということから、教科教育でいえば「社会科」だろうか。戦後「社会科」が創設されたとき（昭和21年）の目標は、「個人生活」や「家庭生活」、「社会生活」「経済および職業生活」について生きていく力をつけるというものであった<sup>(9)</sup>。領域でいえば、「総合的な学習の時間」の目標も創設当時（平成10年）は自ら課題を見つけ考え、判断し、よりよく問題を解決する力や自己の生き方を考える力を育てるとしている<sup>(10)</sup>。そのほか、「特別活動」においても、協力や協働、コミュニケーション、異文化理解等といった社会的資質を育成すると林ら（2017）は述べている<sup>(11)</sup>。また、林ら（2017）は、「生徒指導」における人格尊重や個性伸長、社会的資質育成などが可能であるとし、「特別活動」と道徳教育とを連携させたカリキュラムの開発が必要であるとしている<sup>(12)</sup>。

このように教科・領域、指導のめあて等からも、次世代の子供たちに必要な資質・能力、あるいはつけたい力は、自分自身に関すること同時に他者への関わり、命や自然との関わりであり、それらを含む道徳教育を学校教育の中核とすべきと確信するに至った。道徳教育は、学校教育のすべての教科、領域、指導と関連させながら、今年度より教科化された「特別の教科 道徳」に示されている4つの視点（「自分自身に関すること」「人との関わりに関すること」「集団や社会との関わりに関すること」「生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」）を内容に盛り込むことでしっかり人間としての生き方や社会の在り方の根幹を考えさせることができるのではないだろうか。押谷（2016）は、子供たちは道徳的諸価値についての理解を深めながら、自己を見つめ、多面的・多角的に菅家、人生や生活のさまざまな事象を乗り越えていく判断力や実践意欲と態度を培う、としている<sup>(13)</sup>。

この押谷（2016）の研究や教員アンケート調査結果、OECDのEducation 2030 Projectから導き出したものは、社会の変化は大きい、根底にあるのは多様性を認め合う共生社会をどう生きるかという課題である。共生社会とは、障害のある人もない人もともに生きるノーマライゼーションを目指すことであるという考え方もあるが、もっと大きな枠組みでとらえるならば、人間が自然環境や他の動植物とともに共生する社会であるともいえる。自然環境や動植物との共生は、まわりまわって自然災害など人間の生活に大きく影響するからである。これら解決困難な問題に個人で模索するだけではな

く、協働してよりよい方向に進んでいくという方策を取りながら、一人一人はもちろんのこと、誰もが幸せにともに生きる社会を築いていくための教育が求められる。特に、社会的に弱い立場にある者が住みよい社会の構築は不可欠であろう。現代社会の分析をすればさまざまな社会のありようが想起できるが、インクルーシブ教育や多様性を認める教育、持続可能な社会への参画などを視野に入れた「共生社会」である。

では、これからの社会を人として自分らしいよりよい生き方をする、主体的に判断し行動する、人と協働し問題解決を図ろうとする、弱者も暮らしやすい社会を構築する、そのような実践力を子供たちにつけさせる教育を行うポイントは何であろうか。プロジェクト・メソッドを提唱したキルパトリック（1969）は著書『教育哲学』の中で、「意識的な道徳は、人間の行為により影響されるすべての人々の生活を奨励し、助成するよう働きかける、確固とした義務と意志とになる（略）その価値がじゅうぶんである場合すべての人びとにとって価値ある生活を助成し奨励する。」と述べている<sup>(14)</sup>。現実の生活に立脚した教育を強調したプロジェクト・メソッドの考え方で道徳教育を根幹とする教科・領域の指導を行えば、人間として自分らしく生きることを追い求め主体的に判断し行動する実践力のある子どもを育てられるのではないだろうか。このことは、「総合単元的道徳学習論」を実践してきた押谷（1995）や多くの教育実践家の研究論文からもわかる<sup>(15)</sup>。また、アメリカでは、モラルエデュケーション（道徳教育）やキャラクターエデュケーション（人格教育）で、子供に社会で生きる力をつける教育を行っている。アメリカ社会は、日本よりはるかに多様な人種、言語、文化等で成り立っている。キャラクターエデュケーションの第一人者トーマス・リコーナ（2001）は、理想の人間を形成する心の教育として「2R」が重要であると提唱する<sup>(16)</sup>。「2R」とは「Respect（尊敬）」と「Responsibility（責任）」である。多様性を認めあい、共生社会を生きていくうえで、自分や他者への尊敬の念や自身の義務や責任を果たす態度は非常に重要である。社会学者であるデュルケム（1964）は、その著書「道徳教育論」の中で「われわれは、内部に人格を持ち、宗教的信仰、道徳的信念、国民的職業的伝統、などあらゆる種類の集会的意見であり、これら総体で社会的存在（l'être social）を形作る。この存在を個々人の内部に作り上げることこそが教育の究極の目的である」と述べている<sup>(17)</sup>ように、社会のありようと教育について考えるとき、道徳的信念は重要である。

## 5. まとめと今後の課題

次世代の子供につけるべき力を育成するために、道徳教育を中心にしながら、関連する教育活動を充実させていくことはもちろんであるが、教師が意識していない課題であっても、子どもが必要であると感じている課題もあるだろう。道徳教育を推進したから子どもに生きる力がつくというものではない。目の前の子供がこの先もずっと自分から進んで主体的によりよく生きようとする力をどのように学ばせるのか。学校教育に携わる者はその点をきっちりおさえて教育全般に取り組むことが、これまで以上に求められている。

OECD各国が、2030年の社会を生きる子供たちを想定して教育改革に取り組んでいる。日本の学校現場の教員も、予測不可能な未来の社会を想定して、子供たちに自分の人生を強く生き抜いてほしい

と強く願っている。OECDは、「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマを克服する力」「責任ある行動をとる力」といった3つのキー・コンピテンシーを特定しているが、目の前の子供たちは我々の期待を担いきれるほど強くはない。このような現状から、特別支援教育の「違いを認め合い、自分の個性を大切にし、得意を生かし、苦手を克服する」という基本理念の視点が今こそ重要であると考ええる。教員のアンケートに多く見られた「自分を大切にできる力」「多様性を認め合う力」「よりよく生きる力」「思いやり」「寛容の心」などは、障害のある子もいない子も等しく共生社会を生きていくことを想定して書かれたものと考ええる。これらのことから、筆者は、学校教育はインクルーシブ教育の視点から子供たちの資質・能力を育成すべきではないかという思いをさらに強く持った。今後は、次世代を生きる子供を育てる教育をどう実践していくかをさらに追究していくことが課題であると考えらる。

#### 【註】

- (1) 文部科学省「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の制定並びに幼稚園教育要領の全部を改正する告示、小学校学習指導要領の全部を改正する告示及び中学校学習指導要領の全部を改正する告示等の公示について（通知）」平成29年3月31日のp.2 18より引用。このあと、「知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視」（1.14）し、確かな学力を育成することや「特別教科化など道徳教育の充実や体験活動の重視、体育・健康に関する指導の充実により、豊かな心や健やかな体を育成すること」（1.17）なども挙げられている。
- (2) 同上 p.3 1.24～p.4 1.37より引用。道徳教育については、いじめの問題への対応や、答えが1つではない課題を一人一人の児童生徒が道徳的な問題ととらえて向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」への転換を図るものとしている。また、特別支援教育については、各教科等の指導にあたり、学習上の困難に応じた指導内容や指導方法の工夫を行うとしている。
- (3) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」平成28年12月21日のp.1 1.7より引用。「はじめに」には、2030年の社会が大きく変わることを見据えて、明治の学制から蓄積された我が国の教育を評価しつつ、新しい学校教育のあり方を求めていく必要があるとしている。
- (4) 同上 p.9より引用。オックスフォード大学のマイケル・オズボーン氏が「今後10年～20年程度で、半数近くの仕事が自動化される可能性が高い」という予測と、2045年には人工知能が人類を越える「シンギュラリティ」に達するという指摘についても言及している。
- (5) OECD website 「OECD Education 2030」 <http://www.oecd.org/education/2030/>（2018.8.15 確認）  
このサイトから、ポジションペーパー（序文）を英文で読むことができる。また、文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室による仮訳が公表されている。（「初等教育資料平成30年5月号」を参照のこと）文部科学省の仮訳では、「教育とスキルの未来：Education 2030—グローバル化の進展や技術の進歩の加速によって、我々は、社会、経済、環境など様々な分野において前例のない変化に直面している」となっている。また、このプロジェクトの目的は、各国が2つの大きな問いに対する回答を見つけることを手助けするとある。1つは、現在の生徒が成長して、世界を切り拓いていくためには、どのような知識やスキル、態度・価値が必要か、もう1つは、学校や授業の仕組みがこれらの知識やスキル、態度・価値を効果的に育成していけるようにするにはどうしたらよいか、であるとしている。
- (6) 文部科学省ホームページ中央教育審議会初等中等教育分科会（第100回）配布資料「2030年の社会と子供たちの未来」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364310.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364310.htm)（2018.10.15 確認）  
「新たな学校文化の形成」「学校の意義」など学校が子どもたちにつけるべき力や多様な人々とつながりなが

- ら学ぶという問題意識の下で、教育課程の編成や教員の在り方、教育インフラについて取りまねばならないとある。このほか、国立教育政策研究所は紀要第 146 号 (2017.3) では、田熊美保「Preliminary Findings from the OECD Education 2030 project (OECD 教育 2030 プロジェクトからの中間報告)」[http://www.nier.go.jp/03\\_laboratory/kankou\\_kiyou.html](http://www.nier.go.jp/03_laboratory/kankou_kiyou.html) (2018.10.15 確認) らの先行研究論文が発表されている。
- (7) 東京学芸大学では、文部科学省、東京大学、OECD と連携し「次世代教育研究推進機構」プロジェクト事業に取り組んでいる。これは、「日本・OECD 共同イニシアチブ・プロジェクト『新たな教育モデル 2030』」の一環で、平成 27 年度から平成 29 年度までの 3 年間で新たな教育モデルの開発を目指して実施されている研究プロジェクトである。2017 年 3 月に「日本における次世代対応型教育モデルの研究開発」というテーマで成果報告がなされている。これまでの成果として、各教科で育んできたコンピテンシーの分析と、それらの授業法、指導法のデータベース化がされている。
- (8) 西野真由美 (2017) 「人格教育と資質・能力」『紀要第 146 号』p.26 国立教育政策研究所
- (9) 「社会科教育資史資料 1～4」(上田薫ほか 東京法令出版 昭和 49 年) の 1 巻 p.197 に戦後の社会科創設時の社会科の目標が挙げられている。教育目標が社会の変化に対応するのは、子供たちはその社会に出て生きていかねばならないからで、子供に育成すべき「資質・能力」と「社会で生きていくための力(人や社会と関わる力や社会的資質など)」は切り離してしまうことはできないと考える。
- (10) 金岩俊明 (2018) 「小学校『総合的な学習の時間』の実践的視座－創設期からの経緯を踏まえて－」『教育諸学研究第 31 巻』(神戸女子大学文学部教育学科) p.43 に、ねらいの経緯について述べられている。
- (11) 林尚示、安井一郎、鈴木樹 (2017) 「特別活動で社会的資質を育成するための指導内容と指導方法の開発に関する基礎研究(2)－生徒指導及び道德教育の機能に着目して－」『東京学芸大学紀要総合教育学系 Vol.68 No.1』p.49
- (12) 同上 pp.52-53
- (13) 押谷由夫 (2016) 「これからの道德教育の展望と課題」『道德教育の理念と実践』放送大学教育振興会 pp.260-275
- (14) W.H. キルパトリック、西本三十二訳 (1967) 「Education for a changing civilization (教育と文化の革新)」表現社 p.172 14
- (15) 押谷由夫 (1995) 『総合単元的道德学習論の提』文溪堂  
当時は、この「総合単元的道德学習論」に基づき、はじめ学校現場で多くの実践が試みられた。筆者も、小学校 6 年生に対して総合的な学習と道德教育を関連させたテーマに取り組んだ。
- (16) リコーナの Character Education については、トーマス・リコーナ、マシュー・デイビッドソン著、柳沼良太監訳 (2012) 「Smart & Good School (優秀で善良な学校)」慶應義塾大学出版やトーマス・リコーナ著水野修次郎監訳望月文明翻訳 岩佐信道解説 (2001) 「人格の教育－新しい徳の教え方学び方－」北樹出版などがわかりやすい。現在までの研究については、T.Lickona “The Center for the 4th and 5th Rs (Respect and Responsibility) <http://www2.cortland.edu/centers/character/> (2018.8.15 確認)  
<http://www.infoagepub.com/journal-of-character-education> (2018.10.15 確認) から見る事ができる。日米の道德教育の比較研究としては、柳沼良太 (2013) 「日米の道德教育に関する比較考察～新しい人格教育との比較を中心に～」『道德と教育第 331 号』(日本道德教育学会) がある。
- (17) デュルケム著、梅根悟、勝田守一監修、麻生誠、山村健訳 (1968) 「世界教育学選集道德教育論 1・2」明治図書 p.27 113 より引用。

キーワード：Education 2030 Project、共生社会、資質・能力、道德教育、協働